

SHOW HEYシネマルーム

★★★★



Data

監督: ジョエル&イーサン・コーエン (コーエン兄弟)
出演: マイケル・スターン/バーグ/リチャード・カインド/フレッド・メラメッド/サリ・レニック/アーロン・ウルフ/ジェシカ・マクマヌス/アダム・アーキン

👁️👁️ みどころ

『ノーカントリー』(07年)をはじめとして、コーエン兄弟の作品は毒気が多いが、さて本作では? 平凡な人間には平凡な生き方が一番。それができれば幸せだが、それを希望しながら、なぜか裏目裏目に。なぜ俺だけが? なぜ俺だけに? そう叫んでも解決策はなさそうだ。

さあ、ユダヤ人社会特有の存在であるラビは、そんな主人公に対していかなる人生の指針を? それにしても、人生ってなぜこんなに不条理なの?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■一瞬、こりゃ一体どこの映画? 何の映画? ■□■

本作は2007年の第80回アカデミー賞最優秀作品賞・監督賞・脚色賞を受賞した『ノーカントリー』(07年) (『シネマルーム18』21頁参照) のコーエン兄弟の監督・脚本・プロデュース作品。そして、時代は1967年、舞台はアメリカ中西部の都市ミッドウエスタの郊外にあるユダヤ人村だ。そんな予備知識を持って試写室に行った私は、映画冒頭に展開される何とも意外な状況にビックリ? こりゃ一体どこの映画? 何の映画?

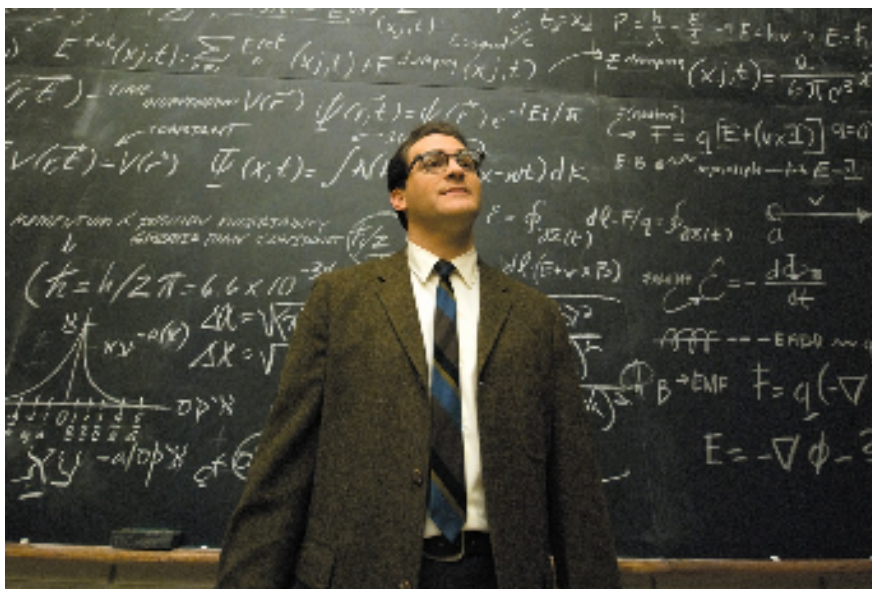
そもそも、そこで語られるセリフが何語? はっきりわからないが、それが英語でないことはたしか。また、時代も1967年と全然違うことは一目瞭然。さて、そこで展開される約5分ほどの寓話めいた物語とは? プレスシートによると、これは100年も昔のポーランドのシュテットル (小さなユダヤ人の村) における物語らしいが、親切を施した老人が悪霊にまががえられて刺されてしまうこの寓話は、一体何を物語っているの?

なるほど、こんなつくり方もあったのか! あらためてコーエン兄弟の映画づくりの斬新性に脱帽。

■□■ユダヤ人は数学・物理の天才が多いらしいが、さて？■□■

冒頭における寓話の紹介が終わると、一転してスクリーンはミッドウエスタン大学で物理学を教える中年男ラリー・ゴプニック（マイケル・スタールバーグ）が登場する。法律関係の講義や講演では黒板を使うことは少なく、学生や聴衆に向かって直接語りかけることが多いが、『博士が愛した数式』（05年）（『シネマルーム10』177頁参照）でもわかるように、数学や物理の講義では黒板いっぱい目にともまらぬ早さで数式を書いていく授業風景が多い。それはラリー先生も同じだ。

目下彼の頭の中を悩ましているのは、第1に、勤務先の大学で終身雇用を受け入れてもらえるかどうかということ。そして第2に、2週間後に迫った息子ダニー（アーロン・ウルフ）のバル・ミツバー（ユダヤ人の男の子が13歳になるときに行われる成人式）を無難にやり過ごすこと。まあ、誰にでも常にそれくらいの「悩み」（？）はあるものだから、無事にこれをクリアすれば、またいつものような平凡な生活に・・・？



DDP 第2弾、コーエン兄弟最新作
『シリアスマン』

(C) 2009 Focus Features LLC. All Rights Reserved.

■□■なぜ俺だけが？なぜ俺だけに？■□■

平凡に生きることを願い、現在平凡に生きているからといって、今後もそのまま平凡に生きられるとは限らない。なぜなら、天災事変もあれば、人間は政治経済・社会情勢の変

化や、職場・友人関係の変化などに対応せざるをえないからだ。「マーフィーの法則」は世界的に有名だが、今ラリーはその法則の真っ只中に？

そう思わざるをえないほど、なぜか最近ラリーの周りでは、次から次へとトラブルが発生中。第1は居候中のラリーの兄アーサーの存在。ラリーの娘サラ（ジェシカ・マクマヌス）にしてみれば、いくら伯父さんであっても、そんな男に長時間バスルームを独占されたのではたまらない。またラリーの息子ダニーはユダヤ人学校に通っているが、授業中にラジオを聞いていたことがバレて大変なうえ、乱暴者の同級生へ支払うべき20ドルのマリファナ代金をラジオと一緒に没収されたため、ボコボコにされるのではないかと目下心配中。また、日本の大学では考えられないことだが、ラリーから落第点をつけられたことに抗議するためにやってきたアジア系学生を、ラリーは正論で追い返したものの、何とラリーの机の上には現金入りの封筒が。ひょっとして、こりゃワイロ？

■□■事態は更に悪化！熟年離婚の危機まで■□■

なぜ俺だけが？なぜ俺だけに？この頃、ラリーはそう思っていたはずだが、事態は更に悪化。ラリーが予想もしていなかった最悪の事態は、長年連れそった妻ジュディス（サリ・レニック）から突然（熟年）離婚の話を切り出されたこと。しかも、何と彼女はラリーの友人であるサイ（フレッド・メラメッド）との再婚を決めているというからビックリだ。

『ノーカントリー』でもコーエン兄弟は、おかつば頭の殺し屋から執拗に追い回される主人公を描いたが、本作でもラリーの身の回りには、次から次へと不幸が襲ってくる。

唯一ラッキーか？とも思えたのは、あるきっかけで隣人のサムスキー夫人と接触できたこと。サムスキー夫人が裸で日光浴をしている姿を拝めたのは、TVアンテナを直すためにラリーが屋根に上った時のホンの偶然からだが、ある日サムスキー夫人の家に招き入れられたラリーは・・・？見るからに色気ムンムンのサムスキー夫人とマリファナ地獄にはまってしまうと、そりゃヤバイ。ひょっとして、これにてラリーの大学教授人生は、ボロボロに・・・？

■□■「ラビ」に注目！ラビもピンキリ？■□■

本作の主要ロケ地となったミネソタ州ミネアポリスは、コーエン兄弟の出身地らしい。したがってコーエン兄弟が本作で描いたユダヤ人社会のあり方は、コーエン兄弟にとってはなじみ深いコミュニティだったらしい。ナチス・ヒトラーによるユダヤ人迫害は有名だが、全世界に散らばったユダヤ人たちは各地でたくましく生きている。これは、私が最近いろいろと接触を深めている華僑も同じだが、本作にみるユダヤ人社会特有の教会のあり方や成人式のあり方は実に興味深い。

しかして、本作で何よりも注目すべきはラビという存在だ。私たちにおなじみの知っているユダヤ人社会は、森繁久彌がテヴィエ役を演じたミュージカル『屋根の上のヴァイオ

リン弾き』だが、そこでもラビが登場していた。しかして、本作では、次々と重なるトラブルに悩むラリーが、それを切り抜けるべく相談するラビがたくさん登場してくるので、そんなラビの役割に注目したい。キリスト教でも仏教でもイスラム教でも、宗教者の間に階級・階層があるのは当然だが、さて、ラビのそれは？

本作ではそれはよくわからないが、ベテランのラビから若いラビまでたくさん登場し、それぞれラリーに対してアドバイスを与えるが、それってホントに「生き方のヒント」になるの？本作にみるラビの教えをみていると、ラリーは私の最新本である『名作映画には「生きるヒント」がいっぱい！』（河出書房新社）を読んだ方がベターでは？とついそう考えてしまったが・・・。

■□■ラリーの問題は歯痛のようなもの？■□■

張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『活きる』（94年）は、たくましく生き抜く主人公たちの姿を描くことによって、人の一生は「人間万事塞翁が馬」であることを実感させてくれる中国映画の名作中の名作だった（『シネマルーム2』25頁、『シネマルーム5』111頁参照）。つまり、人生はいいことばかりではないのはもちろんだが、そうかといって悪いことばかりでもないものなのだ。ところが本作におけるラリーは？

コーエン兄弟の映画は教科書的な教えとは正反対（？）だから、これでもかこれでもかと不幸に襲われるラリーに対する教科書的な処方箋を示してくれるとは思えない。そう思っていると案の定、2人目のラビであるベテランのナフナ師がラリーに語ったのは、ある歯科医が体験したという世にも風変わりな物語。歯の痛みはどうにも我慢できないものだが、なぜか少しずつ和らぎ、そしていつの間にか消えてしまうもの。そう考えると、ラリーの痛みもそれと同じ？人ゴトだと思ってそんな気楽なことを語ってもらっても困るが、高潔な人格をもつラビの言葉なら・・・。

2010（平成22）年12月13日記